

# 荒時の秋祭

——奈良県天理市荒時——

橋本裕之

## 一 はじめに

## 二 秋祭の準備

## 三 宵宮の次第

## 四 本祭の次第

## 五 おわりに

### 論文要旨

本稿は奈良県天理市荒時の秋祭を対象にした調査報告である。この儀礼はかなり安定した形式を維持しているかのようであるが、じつのところ社会的かつ経済的な環境の変動とともに少なからず変化してきた。それじたいはけつして異彩を放つものではないものの、随所に歴史が刻印されていることには、やはり大きな注意をはらっておかなければならぬ。本稿ではこうした認識にもとづきながら、一九九一年におこなわれた荒時の秋祭についてくわしく報告している。

そなばあい、主要な関心は現在の秋祭を記録するところにむけられる。すなわち、一九九一年という「調査時現在」における調査報告を提示することによって、幾多の変遷を経てきたちがいない秋祭の現在を変化の相に照らして微視的に記述しようというのがねらいである。その結果として、近代化

の過程にさらされてある荒時という集落の現在が浮かびあがってくるのではないだろうか。

ところで、秋祭は荒時に数多く伝承されている儀礼のうちでも最もよく保存されており、住民の意識を顕在化させる重要な媒体であるように思われる。そこで本稿では、秋祭にかかる人々の意識における変化についていささか論述している。具体的には、秋祭に組みこまれている奇妙な笑いの作法とそれにまつわっておこなわれる（おこなわれない）説明にそくしながら、本来的に言語化されない、つまり意味に回収されることをこぼむものとしてある笑いを説明するためにさまざまな知識が動員される可能性を強調するとともに、笑いにまつわる説明が急速に世俗化しつつある現状を指摘したのであった。

いずれにしても、儀礼という形式的行動に対する説明の所在は、今日でも微妙に揺れ続けている。したがって、眼前にある荒時の秋祭がかなり安定した形式を維持していたとしても、やはり黙してとおりすぎてしまふわけにはいかなかつたのである。